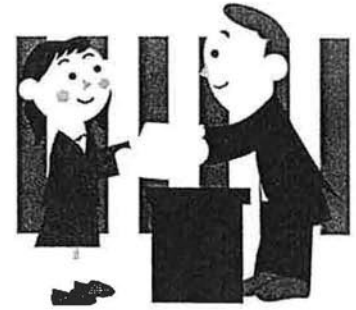


FD ニュースレター

Health Sciences University of Hokkaido



北海道医療大学FD委員会

FD News Letter No. 6

■現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に採択

～地域への健康支援と融合・連携した学生教育～

歯学部口腔衛生学講座 教授 千葉 逸朗

本学は、昨年度のいわゆる教育COE「特色ある大学教育支援プログラム」～地域・大学連携による医療系基本教育～に目出度く採択されました。それに気を良くしていたところが、今年度も教育COEの第二弾、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」というのがあるが、申請するかどうかということが学内で議論になりました。

昨年度は、地域・大学連携というテーマで申請したのですから、同じテーマという訳にもいかず、どうしようかと困惑していました。でもこのような申請はとりあえず出すことに意義があるというのは研究COEの申請の頃からの癖になっていましたので、さほど苦もなく書類作りが始まりました。私の悪い頭から叩き台となるようなものを絞り出しましたが、本学の「特徴」、「売り」を考えるとやはり「地域」がキーワードと考えました。考えた題名が「地域への健康支援と融合・連携した学生教育」ということで、「なーんだ、昨年度とどこが違うの?」という基本的な疑問が湧いてきました。その後、心理科学部の阿部和厚先生、人間基礎科学講座の江口正尊先生、小澤次郎先生、さらには飛岡範至氏に絶大なる御協力を頂き、申請書を作成致しました。折しも石狩当別駅前「歯の健康プラザ」という耳慣れない口腔健診施設が出来たので、これを題材にして、歯学部を中心に「前回の看護福祉学部のテーマとは違うんだ」というところをあまり強調し過ぎず、なおかつ独創性をアピールしようという面倒な作戦に出ました。しかしながら、この時には採択されるとは夢にも思っておりませんでした。

では、ここで現代GP申請の内容について説明させていただきます。

新医療人を教育するためのニーズ

最近の医療人の大きな問題点は、患者とのコミュニケーション能力がない、あるいは問題解決能力がないなど、いわゆる「人間力」の不足です。これは現在の歯科医療が基本的に附属病院での「患者待ち」の体制になっていること、そして歯科医学教育が「見学」主体となっていたことに大きな原因があります。患者とコミュニケーションすることができるようになるためにはいわゆる積極的、能動的教育が重要になります。講義室での一方通行の知識伝達もある意味では重要ですが、この「人間力」のアップこそが、我々の目指す医療人教育の大きな目標です。専門職業人としての導入教育の実践の場として地域へ出向き、地域を「活性」することによって、自分を認識し、患者の苦しみを理解し、共感を持てるといった感情指数 (Emotional Quotient (EQ)) の高い人間性豊かな医療人の育成を行おうとしています。また、逆に地域住民の方々も「人間力アップ教育」に参加して頂くために、模擬患者 (Simulated Patient; SP) として活躍して頂いています。すでに 20 名以上の方々を育成し、OSCE だけでなく、普段の授業でも医療面接のトレーニングに貢献して頂いています。

地域の健康に対するニーズ

当別町では、昨年健康増進法の施行に先立ち「みんなであつくり健康とうべつ」という健康推進計画を立案しました。つまり当別町においては「住民の健康を達成すること」が大きなニーズなのです。地域の活性化には健康支援をはじめとした「人を大切にするまちづくり」が大変重要です。この「大学のある町」当別町に対して、健康支援を行うことは当然のことといえます。

地域の健康に対するニーズ

そこで、「新医療人を教育するためのニーズ」と「地域の健康に対するニーズ」を融合させようと考えたのが私たちのプログラムです。

すでに、本学歯学部では、当別町の健康推進計画を支援する意味で、「当別町二万人歯の健康プロジェクト」を立ち上げました。これは当別町の住民二万人の口腔の健康をサポートするものです。通常の「歯科検診」だけでなく、口腔保健教育を行うことのできるような、コミュニケーション能力を備えた医療人を育てるために、本取組を立案しました。

そして、本プログラムの最大の特徴は、その活動拠点として、JR当別駅前に空き店舗を利用した口腔健診施設「歯の健康プラザ」を設立し、医療専門家が学部学生と共に地域に出て、直接住民と触れ合い、また町民も気軽に医療相談を受けることができるといった「地域密着型教育」の場を提供する計画を策定したことです。このように町民の健康管理を目的とした専門施設が設置されることは全国の歯科大学・歯学部では初めての、独創的で斬新な試みです。

本取組はただ単に新たな歯科医師養成のニーズに対応するばかりでなく、現代的医学教育のニーズに応える一つのモデルを提供するものということができます。

「採択」の感激は？

ちょうど海外出張中に「ヒヤリングに残った」という連絡を受けましたが、申請したことも忘れて遊

び呆けて（いえ、仕事に熱中して）おりましたので、何のこともやら判らず、ただ、「台風18号が来ているから成田に着いたら札幌には帰ってくるな。東京で待機せよ。」と指示されたことだけが頭に残りました。ヒヤリングには廣重学長、大野歯学部長、江口歯学部学生部長、そして鈴木局次長という錚々たるメンバーが出席しましたが、私は時差ぼけで要領を得ず、ヒヤリング前のリハーサルでは「大丈夫か？頑張れ！」と叱咤激励され、文字通りヒヤヒヤながらのヒヤリングでした。

現代GPの6つのテーマ(①地域活性化への貢献、②知的財産関連教育の推進、③仕事で英語が使える日本人の育成、④他大学との統合・連携による教育機能の強化、⑤人材交流による産学連携教育、⑥ITを活用した実践的遠隔教育(e-learning))に対して全国の大学から559件の申請がありました。採択された課題は86件(15.4%)、「地域活性化への貢献」の分野に限れば246件中36件(14.6%)でした。この採択率の低さに大変驚かされました。しかも歯学部としては国公立大学を通じて唯一本学の課題だけが採択されたと聞き、またまた驚いてしまいました。本学は以前より看護福祉学部を中心にボランティア活動を主体とした地域との連携を図ってきました。この実績がベースにあって、さらに発展し、評価されたものと思っています。今までにない、新たな試みなので、町民の方々、あるいは大学の方々に認知して頂くまでには時間がかかると思いますが、「前向き」に頑張っていきたいと考えています。叱咤激励をお願い致します。



(←石狩当別駅前に位置する「歯の健康プラザ」)

(「歯の健康プラザ」における口腔健診風景→)



■平成16年度FD合宿研修を実施

学生に魅力ある授業

FD委員会委員長 心理科学部 教授 阿部 和厚

今回で3回目のFD合宿研修は、平成16年11月12日(金)～13日(土)と例年と同様「ないえ温泉ホテル北の湯」で行われました。テーマは、これまで教育の全学体制、地域連携教育をとりあげてきましたが、今回は授業法をとりあげました。

FD合宿研修では、毎回、現実的な案がかなり提案されます。参加者を5グループにわけ、さらに各グループで提案を2回おこなうと、もうすでに20件がFD合宿で提案されたこととなります。これはぜひ、現実に生かして欲しい。これには、教育の全学体制も地域連携教育でも、システムとしての対応が必要です。よい案がどんどん現実のカリキュラムに反映されなければ、教育改善の活性化はいつの間にか尻つぼみになるでしょう。このような体制は、平成16年度の全学教育体制再構築の課題となっていました。地域連携教育推進特別委員会でも検討してきましたが、どのようになっているのかははっきりしていませんでした。そのようなこともあり、今年は個人でも対応が可能となる授業法にスポットをあてたものです。学生に魅力ある授業と題して次の内容で2日間の研修となりました。今回は、4グループで作業をしました。

なお、先日、平成17年4月から教養教育運営委員会が設置されることが決まり、地域連携教育も含めた全学に共通する教養教育に関するカリキュラムの充実・推進を図るための検討も同委員会で行われることになりました。

ワークショップ1：授業で学生にやる気を起こさせるには

- 1) 初年次前期 その他
- 2) 大人数授業 その他
- 3) 低学力学生 その他
- 4) IT活用 その他

ワークショップ2-4：授業設計

- 1) 1年生前期知識伝授講義型(受動型をいかに打破)
- 2) 社会・現場との接触型(行動型)
- 3) 学生参加少人数グループ学習型
- 4) eラーニング型(欠点と長所をふまえて、どうしてもITを使わなければならない設定)

ワークショップ5：教育改善・改革の方向

- 1) 導入教育その他
入学生の学力低下、大学での学び方が問題の学生への教育
- 2) 教養教育その他
大学の理念目標を実現するための教養教育のあり方
- 3) 教養教育体制その他
臨機応変に多様な教養科目を提供していける体制
- 4) 全学教育体制その他
臨機応変に多様な共通科目を提供していける体制

また、素晴らしい案がたくさんできました。そして集中して検討した内容は生き生きとして、行け行けという活力にみちています。こういった提案の財産を生かしながら、大学の教育改善がどんどん進んでほしいですね。導入教育とか、分野をこえた統合、複合的内容の科目を膨らませて、この大学の総合的教育力が外からも見えるようにするにはどうしたらよいのでしょうか。新しい体制に大いに期待します。

それから、今回のFDの特徴は、日程の関係で全体としての参加人数が少なかったため、いつもの5グループを4グループで実施。このため、進行に余裕がもてました。タスクフォースがすばらしかった。この大学をよくしていける、前向きの人材が少くない。こういった人材をFD委員会などに生かす体制もほしいと感じます。さらに、「にわかシンポ：授業パーツ：私の工夫」では、その日に適当な人物を指名し、授業の工夫について5分程度で紹介してもらいました。ここにも教育への熱意がみえています。歯科衛生士専門学校での指導協力体制もいいですね。面白かったのは「にわか演奏会」。近藤里美タスクフォースが音楽室からみつくりつた多種多様な楽器。即興演奏、にわかチンドンと盛り上がりました。

さて、平成17年度はもうテーマが決まっているかと思います。廣重学長が提唱されている「落ちこぼれのない教育」を取り上げないわけにはいかないと思っています。FDの方法の基本編からアドバンス編となるでしょう。これまで参加の方もぜひリピーターとなって、わが大学の教育力向上に大きな力をかけてほしいと思います。



(研修会場到着後、さっそく全員で記念撮影)

泊まり込みFD 参加者&タスクフォース感想

Aグループ (グループ名: えーじゃないか)

とても「えーじゃないか」、O型とA型

我々のグループは初年度前期を設定して議論を行った。授業で学生にやる気を起こさせるにはの作業目標で、やる気をどう起こさせるか (WS 1)、科目名と目標の設定 (WS 2)、授業設計 (WS 3)、評価 (WS 4)、教育改善・改革の方向 (WS 5) へと順次討論をしつつ、作成を行った。越野さんのリーダーとしての積極性にひきずられ、全員が討論に積極的に参加した。役割は決めてはいたが、それなりに作業過程の中で各人の適切な介入がされた。KJ法をWS 1、WS 2で

看護福祉学部 臨床福祉学科 谷中 輝雄
導入した。それが授業設計についても役立ち、作業としてはすばやく出来上がった。しかし、授業計画の中でのフィールドワークを授業の中に入れることから、時間数、予算、教員配置等現実的でないとの指摘をうけ、評価 (WS 4) の段階で修正を行い、フィールドワークを小グループごとで地域に出向くことに変更した。当別町をフィールドとしてその社



会資源を情報として提示、各グループごと調査体験をした後に報告をする形にした。評価は3段階のポイントをもうけ、事前学習(20%)、体験学習報告(40%)、最後のレポート(40%)の配分として評価をすることにした。

入学時に意欲をもてない学生に対して本人の得意分野、希望などを考慮して、転学、転科などの指導、担任の活用、できればスクールカンセラーの配置などが

されたらよいとの提言がなされた。

どうでも「えーじゃないか」グループでなく、とても「えーじゃないか」のチームであった。グループ全体としては血液型でいうと、O型3名、A型3名の構成であった。大変まとまりのよいグループであったのは、O型とA型の組合せのよさではなかったかと、グループでは評価した次第である。



(←廣重学長のご挨拶に聞き入る参加者)

ご挨拶の主旨： 研修の成果を実際にどのように実施していくかが重要である。焦らず、ポディーブローのように効いてくれば良いと思う。平成15年度に採択された文部科学省の特色ある大学教育支援プログラムをより充実、具体化しなければならず、このFD合宿研修の意味が理解いただけると考える。

Bグループ (グループ名：B&B)

「教育」において一番大切なのは人

二日間のFD研修を無事終えることができ、何よりでした。はじまる前は、私は小心者のためか、とても不安でしたが、Bグループの先生方に恵まれたため、充実した日程を楽しく過ごすことができ感謝しています。「人」という文字は、支え合うからこそヒトと読む、という、何やら道学者めいて面映いのですが、やはり人材こそが「教育」において一番大切であるという思いを新たに致しました。もちろん、このFD研修を企画推進されている学長・FD委員長・タスクフォース(与力?)等々、たくさんの方々の情熱と努力の賜物であることはいまでもありません。また、あくまでも一般論ですが、「研修」は上意下達式の強制的

看護福祉学部 人間基礎科学講座 小澤 次郎
指導に陥る危険がありますが、この「研修」では年配の先生方も多く参加され、学生との柔軟な関わり方が教育にとって重要であるなど、ご自身の教育体験に裏づけされたベテランの話をうかがうことができ、有益でした。普段、あまりお会いしたり、お話ししたりできない分野の先生方とも接することができ、その能力のすばらしさを目の当たりにすることができて、本学の将来もきっと明るいものであろうという確信に至りました。



Cグループ（グループ名：Cedille）

いったいどんな奥地まで・・・？

ある朝、バスに寄せられ、いったいどんな奥地まで連れて行かれるのだろうと不安に駆られていたのが、FD合宿の始まりである。実際に合宿を終えてみると、諸先輩方に脅されていたほどの物ではなかった。プログラムの時間配分も良く、内容もそれなりに有意義であったと思う。

今年のテーマは、授業内容の改善というもので、いろいろと学ぶべきことも多かった。授業の設計について学んだのは、20年ほど前に教科教育法を受講して以来かもしれない。学生時代に教職課程と縁がなく教育法など学んだ事のない先生方もいらっしゃるかもしれ

心理科学部 言語聴覚療法学科 小松 雅彦
ないし、そもそも中・高の教科教育法が大学の専門教育にそのまま当てはまるわけでもない。そういう点で、有意義な研修だったと思う。私にとって、ここで学んだことをそのまま英語の授業には使えないが、刺激にはなった。

ただ、本校の文化に染まりきっていない私には、授業内容の向上以外に、もっと改善を要することがあるのではないかと感じられる。



（←発表風景）

（グループ作業の風景→）



Dグループ（グループ名：でたとこしょうぶ）

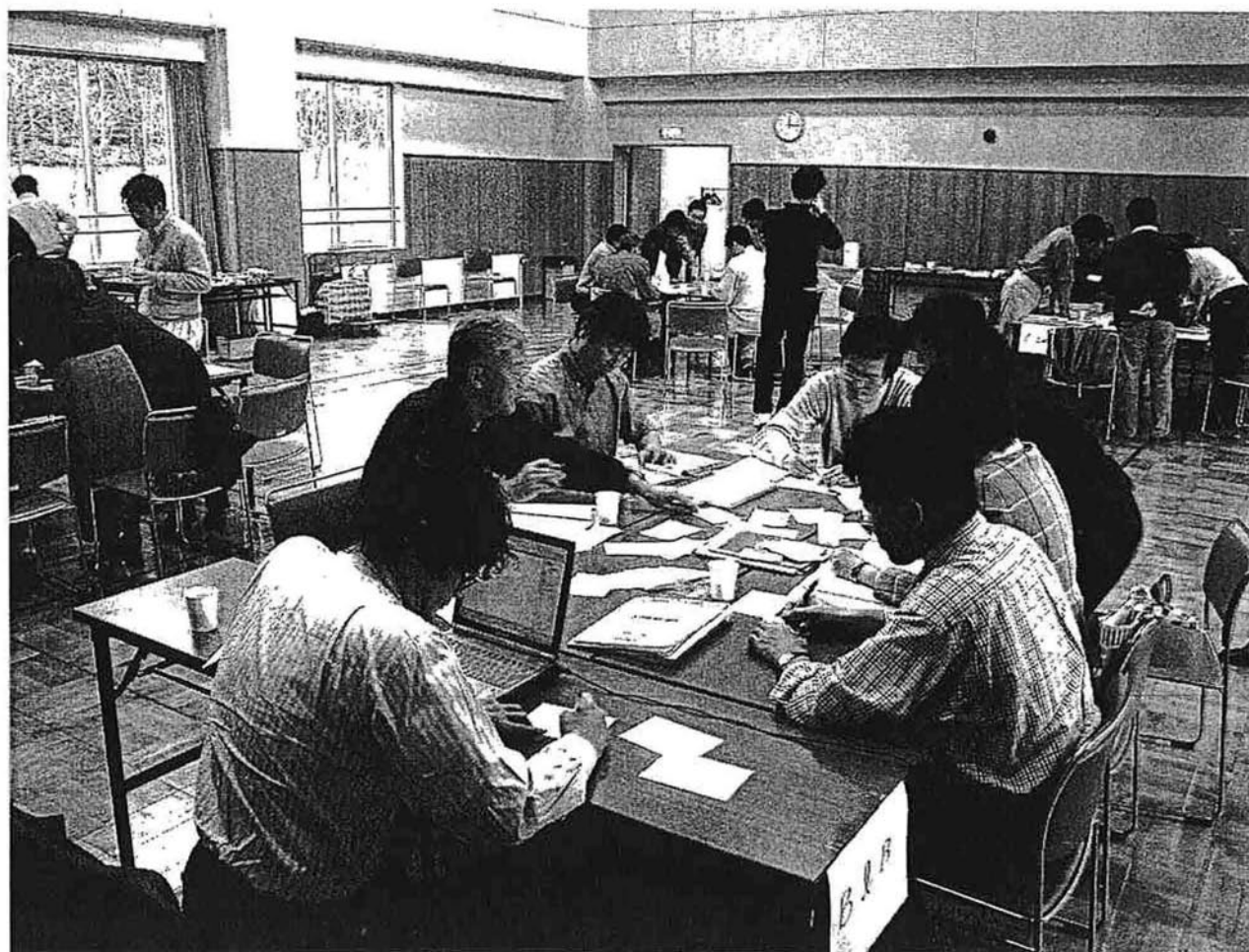
日頃交流の無い他学部教員と考え、発表しあい一番の収穫に

歯学部 齋藤 正人

D班に課題として与えられた IT を活用した e-ラーニング型学習は、コストの問題、コンピューターの習熟度、コミュニケーションの問題および成績優秀な学生のみ効果的？等々、様々な問題があるものの今後の学習様式として必須であり、本学も早急に取り組む必要があると考える。このような教育問題を常日頃交流の無い、歯学部4名と看護福祉学部3名の教員で考えあい、発表しあったことが一番の収穫であった。それぞれ専門や個性の異なる方が集まり話し合うことにより、様々な考え方を多少なりとも吸収できたので

はないかと思う。種々事情があっただろうが、薬学部、心理科学部の方々がもう少し参加していたらと少々残念であった。

「にわかシンポ・授業のパーツ・私の工夫」は非常に参考になり有意義であった。またディレクター、タスクフォースおよび事務の方々の苦労は大変なものだったと思う。この場をお借りしてお礼申し上げます。



(グループ作業の風景)

タスクフォースとしてFD合宿研修に参加して

いろいろな経験の積み重ねが将来役に立つものに？

前年度は研修者として、今年度はタスクフォースとしての参加でした。「タスクフォース」なんて偉そうな名前ですが、ほとんどこけおどしで、実際は単なる説明係り、進行係り、世話係りです。基本的には指導する立場ではなく、ワークショップの進め方などについての助言程度ですから、作業が波に乗ってしまえば、もう何もすることがなく、ちょっと退屈です。

退屈の憂さ晴らしはグループ発表の時です。発表・討論を活発なものにもっていくのもタスクフォースの仕事と勝手に思い込み、周囲の冷たいまなざしにもめげず、質問、意見、感想に励みました。夜の懇親会でも励みました。でも、自己評価としては一研修者として参加した前年度よりもかなりおとなしかったと思っています。タスクフォースとしての意識があったのでしょうか。

FD合宿は役に立つでしょうか？わかりません。でも、経験は大事です。いいことなのか、どうでもいいことなのか、経験してみなければわかりません。よくわからないけれども、「まあ、やってみよう」、「さあ、

薬学部 人間基礎科学講座 樋口 孝城

やってみよう」、「やるからにはやってみよう」。私はいつもこんな調子です。いろいろな経験を積み重ねておけば、将来役に立つものも得られるかもしれませんが、役に立たないものに二度手間をかける愚を防げるかもしれません。



FD合宿研修を、大学という「企業」の研修と位置づけたならば、かなり強力な実施体制、方向性が要求されます。厳しい将来を考えたならば、全学共同体意識の醸成が必要でしょう。とはいえ、「独立人の集合体」、「教員の多様性」こそが大学の特徴でもあり、これは往々にして「共同体・組織」と相容れないところがあります。FDの根底には「組織」があります。私自身のように、長年の大学教員暮らしで「自由、我儘、好き勝手、いい加減」がすっかり身に付いた人間が、組織的思考へと頭を切り替えるには時間がかかりそうです。

合宿研修の在り方いろいろ！？

昨年度研修を受ける立場で参加した私が、今年度はタスクフォースとしてレクチャーする立場で臨むことになった。昨年度には日頃から感じていた授業での問題点を解決する方策が見つかるのではないかと期待したが、残念ながら研修自体から何のヒントも得られなかった。これは研修全体のテーマが私の思い描いたものとはかけ離れていたからだ。それでも、多くの参加者が述べているように、他学部の先生との交流を通して共感し合い、また問題解決に繋がるヒントを得ることもできた。

さて、今年度の合宿研修のテーマは、まさしく私が参加したいものであった。残念ながらタスクフォースとしての立場から、グループ作業に参加することも意見を述べることもできず、余裕もなかった。事前に指導を受けたとは言え、私にもわかタスクフォースであり、研修参加者同様に何をどのように進めれば良いかをマニュアル通りに時間に追われながら進めるしかなかった。今回の研修は私にとって精一杯であったが、

歯学部 口腔解剖学第I講座 坂倉 康則

「にわかシンポ」は短時間でも意見交換の多いセッションであり、有意義であった。「私の工夫」と題した事前アンケートを提出してもらい、授業でどのような工夫をされているかを紹介してもら



った。特に、歯科衛生士専門学校で行われている少数人数グループ学習の形態は実際に授業で行われている工夫であるだけに、強く興味を引かれたのは私だけではないと思う。ディレクターの阿部さんいわく、「合宿研修の参加者が実際に体験してみても良いね」と。今回の研修で一回りしたとも聞き、今後の新たな合宿研修の在り方が見えてきたようにも思える。できることならば、事前に研修のテーマや内容を知らせてもらおうと、参加を希望される方も出てくるのではないだろうか。また、今年度のように、金・土曜日の合宿研修であれば参加しやすいとも感じたFD研修であった。

皆の豊かな発想を生かす場があれば、研修の成果は何倍にも

歯学部 口腔生化学講座 荒川 俊哉

この第3回目のFD合宿は、第1回目引き続き2度目の合宿参加になります。今回はタスクフォースとして研修のお手伝いをさせていただきました。この合宿は、前回同様たいへん有意義なものとなりました。FDの研修内容はもちろんのこと、それ以上に他学部の先生方との交流に得るものが多くありました。

FD合宿研修のプログラムには授業スキルを検討するグループディスカッションと夜のディスカッションがあります。夜のディスカッションでは、大学の将来構想、新しい教育のあり方、学部間の連携授業構想などについても語り合うことができました。先生方の様々なそして豊かな発想や意見を聞いて、皆いろいろなことを考えておられるのだなと感心させられました。そして、このような豊かな発想の持ち主が団結すれば、大学の将来は絶対大丈夫であろうという確信を持った

のでありました。

FD合宿研修は大学をいかによくしていこうかということが前提にあります。個々の授業スキルを磨くことはもちろん大事ではありますが、全学部間のコミュニケーションを通して大学の将来を語ることも同様に重要な事だと、この合宿を経験して思うに至りました。

現在、それらの実現に向けての具体的な話し合いを持つ場が学内に無いということが、少し気になっています。日頃、同じ学内にいながら他学部の先生方との交流はほとんどなく、まして親しく話をする機会は皆無とっていいほどありません。皆の豊かな発想を生かす場が何かあれば、FD合宿の成果を何倍にも膨らますことが出来るのではないかと感じております。



大切なのはこれからどうするか、そしてチームの声を大切に

看護福祉学部 臨床福祉学科 近藤 里美

初めて大学教育に携わることになった昨年は参加者として、そして今回はタスクフォースとして参加させていただきました。個人的には、昨年はイメージでしかなかった「学生中心の教育のありかた」が、今年は本学における一年間の実践と照らし合わせながら参加したことで、より深く理解することができました。また、他学部の教員の方々からの授業の工夫などを具体的に聞くことで、さらに自分の教育方法の可能性が広がり、大変価値ある合宿でした。タスクフォースという役割から振りかえってみると、WSの企画段階から参加していないために、そのグループが取り組むテーマの意図や、グループが目指す方向性を十分に理解し

ていたとはいえ、グループに対する十分な援助ができなかったことがあったように感じます。今後は、その役割を合宿全体で十分生かせるような、タスクフォースに関する計画も考える必要があるのではないのでしょうか。(人選、トレーニング、WSの内容やOHPなどの資料に関わる時期などを含めて)タスクフォースとして関わった今年、さらに強く感じたことは、大切なのはこれからどうするかということです。大学教育に熱意を持ち、資源豊かな教員の方々、このように貴重な時間とエネルギーを費やし、よりよい教育への可能性を探りながら発している声の重要性が、これからどのような力の声となっていくかという点です。本当の意味でチームとしての大学が、組織として発展し、その社会的使命を遂行していくために、まず一人一人のチームの声を大切にすることが必要であると思いますので、私を含め、一人一人がここからどう動くかに期待をしたいと思います。



り、吹いたりとい興による演奏会を楽しんだり、両氏による見事な演奏に酔いしれたり、終始、笑いが絶えない和やかな懇談会となった。))

FD合宿研修プレテスト・ポストテスト集計結果

	項 目	はい		どちらともいえない		いいえ	
		プレ	ポスト	プレ	ポスト	プレ	ポスト
1	カリキュラムとは学科別時間配分表および時間割のことである。	1人 (4.2%)	3人 (12.5%)	6人 (25.0%)	2人 (8.3%)	17人 (70.8%)	19人 (79.2%)
2	教育目標とは、教員が何をなすべきかを明確に規定したものである。	5人 (20.8%)	7人 (29.2%)	4人 (16.7%)	1人 (4.1%)	15人 (62.5%)	16人 (66.7%)
3	教育目標を細部に至るまで具体化しておけば、教育計画の不十分な部分を発見することができる。	7人 (29.2%)	19人 (79.2%)	13人 (54.2%)	1人 (4.1%)	4人 (16.6%)	4人 (16.7%)
4	教育目標を設定しておかなくても、正しい評価は可能である。	1人 (4.2%)	0人 (0.0%)	2人 (8.3%)	1人 (4.2%)	21人 (87.5%)	23人 (95.8%)
5	講義は知識の伝達のために必須の教育方法である。	7人 (29.1%)	3人 (12.5%)	7人 (29.2%)	9人 (37.5%)	10人 (41.7%)	12人 (50.0%)
6	問題解決力を教育するには、教師が問題解決の仕方を示すのがよい。	1人 (4.2%)	1人 (4.2%)	14人 (58.3%)	8人 (33.3%)	9人 (37.5%)	15人 (62.5%)
7	学生が実施問題にぶつかる前に関連する基本的知識を教えておかなければならない。	14人 (58.3%)	5人 (20.8%)	6人 (25.0%)	10人 (41.7%)	4人 (16.7%)	9人 (37.5%)
8	学習者に対してやる気を起こさせることは重要なことである。	23人 (91.7%)	22人 (91.6%)	2人 (8.3%)	1人 (4.2%)	0人 (0.0%)	1人 (4.2%)
9	学生の自主的反复学習を促進できる教師はよい教師である。	22人 (91.7%)	20人 (83.3%)	2人 (8.3%)	3人 (12.5%)	0人 (0.0%)	1人 (4.2%)
10	よい教師というものは、生まれながらのものであって作られるものではない。	3人 (12.5%)	2人 (8.3%)	3人 (12.5%)	3人 (12.5%)	18人 (75.0%)	19人 (79.2%)

ワークショップの評価（一部を紹介）（全体は報告書に掲載します。）

○各項目の習得度

項 目	充分理解できなかった	理解できたが応用力は不十分	十分な応用力が得られた
1) 望ましい教授・学習の原理	2人 (7.7%)	19人 (73.1%)	5人 (19.2%)
2) 教育目標分類	1人 (3.8%)	18人 (69.2%)	7人 (27.0%)
3) カリキュラム立案原則	3人 (11.1%)	16人 (59.3%)	8人 (29.6%)
4) カリキュラムの構成	3人 (12.0%)	14人 (56.0%)	8人 (32.0%)
5) 一般目標と行動目標の区別	1人 (3.8%)	9人 (34.6%)	16人 (61.6%)
6) 教授・学習方略	3人 (11.5%)	16人 (61.5%)	7人 (27.0%)
7) 新しい学習方法	4人 (15.4%)	15人 (57.7%)	7人 (26.9%)
8) 教育評価の原則	3人 (11.5%)	14人 (53.8%)	9人 (34.7%)
9) 評価方法とその特性	3人 (11.5%)	11人 (42.3%)	12人 (46.2%)
10) 合格水準の検定	5人 (19.2%)	16人 (61.5%)	5人 (19.3%)

○興味をもった項目（複数回答可）

1) 望ましい教授・学習の原理	5人	6) 教授・学習方略	11人
2) 教育目標分類	7人	7) 新しい学習方法	8人
3) カリキュラム立案原則	7人	8) 教育評価の原則	10人
4) カリキュラムの構成	8人	9) 評価方法とその特性	9人
5) 一般目標と行動目標の区別	4人	10) 合格水準の検定	4人

○今回のワークショップを、全体的に評価してください。

(1) 内容の価値についてどう評価しますか。

- ・価値なし (0.0%)
- ・価値少ない (11.5%)
- ・いくらか価値あり (27.0%)
- ・かなり価値あり (53.8%)
- ・きわめて価値あり (7.7%)

(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。

- ・多すぎ (15.4%)
- ・やや多い (15.4%)
- ・ほぼ適当 (26.9%)
- ・やや少ない (38.5%)
- ・少なすぎ (3.8%)

(3) 内容の難易をどう感じましたか。

- ・きわめて難しい (3.8%)
- ・やや難しい (42.4%)
- ・ほぼ適当 (50.0%)
- ・少し易しい (3.8%)
- ・易しすぎ (0.0%)

(4) このようなワークショップ形式の教育方法としての効果についてどう感じましたか。

- ・効果なし (0.0%)
- ・効果少ない (18.5%)
- ・ある程度効果的 (33.3%)
- ・かなり効果的 (40.8%)
- ・きわめて効果的 (7.4%)

(5) このワークショップの内容は、あなたの興味に対して適切でしたか。

- ・全く不適切 (7.4%)
- ・やや不適切 (11.1%)
- ・ある程度適切 (37.0%)
- ・かなり適切 (29.7%)
- ・きわめて適切 (14.8%)

○このワークショップで示されたような教育学的方法を今後取り入れようと思いますか。

- ①全く取り入れる気はない (0.0%)
- ②余り取り入れようとは思わない (3.8%)
- ③少し取り入れてみたい (46.2%)
- ④かなり取り入れてみたい (42.3%)
- ⑤大いに取り入れたい (7.7%)

○上記において③から⑤に○をつけた方は、現時点であなたの教育の現場で実現の見通しは？

- ・きわめて難しい (13.6%)
- ・かなり難しい (0.0%)
- ・ある部分では可能 (59.1%)
- ・かなり可能 (27.3%)
- ・全面的に可能 (0.0%)

○今後ともこういうワークショップをもつことに対して

- ・反対 (0.0%)
- ・とくに持たなくてもよい (20.8%)
- ・持ってもよい (45.9%)
- ・持つ方がよい (25.0%)
- ・是非持つべきである (8.3%)

教育あれこれ・導入教育って何？

導入教育って何という声を聞きます。すこしだけ説明しましょう。

一年生の前期から必修専門科目を担当している教員で、学生がどのくらいわかっているのか、ついてきているのかを、気かけながら授業を進めていこうとすると、ある戸惑いがあると思います。教員が立派な専門性を注いでも、学生はとてがついてくることのできる状態にない。わからないことがわからないので質問もできない、ノートもとれない、何を調べたらよいかもわからない。卒業時に国家試験、資格試験と関連するような科目では、担当教員にとって切実なものがあります。

このような状況で、導入教育が重要になります。導入教育は、転換教育ともいわれ、米国ではフレッシュマンセミナーともいわれています。多くの大学でとりいれ、初年次ゼミとっていて、小グループ学習形式でおこなわれるため、北大では20人クラスとして170ほど、東北大でも同じよう、名大や長崎大では7～8人クラスで220とかとききました。国立大学の

多くはこれを取りいれ、いきわたっています。当然のことながら私立大ではなおさら重要になり、これに工夫をこらした大学も少なくありません。その大学の教育の特徴としています。

授業の方法は様々ですが、ポートランド州立大では、これを地域一大学連携で進め、全米のひとつのモデルとなっています。アインシュタインをテーマに地域連携で行ったりです。途中退学をする学生の多い米国では、これによって退学率がさがるといわれています。

このような科目は、全学的な体制で実施されることとなります。教養教育、一般教育の体制のなかで行っています。では、北海道医療大学はどうなるのでしょうか。また教養教育はどうなるのでしょうか。少なくとも知識の伝授ではないでしょうね。理科とか社会、文学などの枠をこえたものも重要です。ここでも新しい体制に対する期待は大きいこととなります。

(FD委員長 阿部 和厚)

編集後記

第3回目のFD合宿研修が終了した。主要な教員はほぼ研修に参加したことになる。来年度は、新たな切り口から研修内容を考える時期にきている。

また、今年度は、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」が採択された。平成15年度は「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」が採択されたが、いずれも「地域との連携」が柱である。採択されたことは本学にとって喜ばしい限りであり、更に内容を充実・発展させ得るよう全教職員のご支援をお願いしたい。

発行日 2005年3月15日

発行元 北海道医療大学FD委員会

編集委員 ○阿部和厚、有末 眞、沢辺千恵子、志渡晃一、関崎春雄、館山光子、東城庸介、○土肥聡明、○中野 茂、長田真美、樋口孝城、溝口 到、森田 勲、和田啓爾、飛岡範至 (○発行担当)